

コラム50:2016 イチゴ栽培 (2016年5月)

4月16日に熊本で地震が起き、TVや新聞等で現場の被害や救援活動の状況が伝わってくる中で、私にはずっと気がかりなことがありました。私が花市場勤務時代に、ハウス視察のために熊本に何度か行ったこともあり、農業被害のことがまず気になったのです。発生から1週間経った頃になって、ある民放の番組で農業ハウスの状況を知ることが出来ました。報道されたのは観光農園をしているイチゴハウスなどでしたが、家屋は倒壊していても、その側のビニールハウスの外枠はそのまま残っていました。しかし、ハウス内はかなりひどい状態でした。高設ベンチはほとんど横倒しになり、赤くなったイチゴが地面に散乱していました。水が止まっているので、園主が今後の出荷のめどはたたない、と言っていましたね。それでもイチゴの場合は最盛期を過ぎているから、まだ救いがありますが、日本一の生産量のスイカやトマトの場合は深刻ですね。酪農なども乳牛の乳搾り機が使用できないとか、大量の水の確保に大変な苦勞をしているようでした。

一緒に農業被害のTV報道を見ていた細君が私に言うのです。
「傷んで安くなった野菜や果物があるんなら、県が買い上げて被災者に配ればええのにねえ」
「そういえば、被災地は新鮮な食料がない言うとなあ」
(腹ただしげに)「ほうじゃろう。早うせんと皆ダメになってしまうよね」
「財源の問題とか、輸送とか配り方とか、いろいろ問題があるんじゃないよ」
(怒って)「お金なんか、後で義援金で埋めればええのよ」
……こういう時には、行政も「柔軟な発想」で、「迅速な対応」をしてほしいものです。あのハウスに残っていたイチゴは、おそらく全部ダメになったのでしょうか。



さてさて例によって前置きが長くなりました。始めて5年目となった私のイチゴ栽培ハウスは、地震にも遭わず、台風にも飛ばされることもなく、無事に存在しています。かといって、終盤になった今年のイチゴ栽培が、順風万般であったというわけではありません。昨年よりは、はるかにシンドカットというのが実感ですね。12月に出荷を始めた頃から、病害にやられているのは

気づいていました。ウドンコ病(注1)ですね。その頃から毎週のように消毒。食べるものに農薬を使用するのは本意ではないのですが、強い薬剤を避け、散布後の収穫を休む、くん煙剤の使用を増やす、などの注意をしてきました。もちろんその時は、ミツバチをハウスの外に隔離することを忘れてはいけません。

しかし、1月の半ばになってもウドンコ病は一向に治まらず、赤くなる前の段階で大量に廃棄しなくてはならぬ状態になり、私は思い切った決断をしました。現在出ている花梗を、一度全部除去することにしました。当分の間出荷できなくなりますが、現在出ている実にはほとんど白カビがついて、商品になりそうになかったのです。その結果、1月の初めから一か月以上に渡って全く出荷なし、という実に情けない事態になってしまったのです。一番イチゴがおいしく、かつ値段も取れる時期だったのですがね。何よりも、納入先のケーキ屋さんに申し訳なかったですね。

長期間の収穫が出来なくなった原因の一つは、ウドンコ病の花梗を除去したことです。もう一つの要因もあったのです。それは低温対策が不十分であったことです。今年の年末は暖冬でしたが、年明けになって一気に寒波が来しました。その頃から、株の葉数が少なく、草丈が小さく、成長していない感じなのです。近くの栽培農家のFさんのハウスを見に行くと、葉が大きく伸びており、株の勢いが全く違うのです。聞いてみると、暖房機を今年から入れて、最低温度を6度に設定しているらしいのです。これを見て、ウチの株は「休眠」しているのだと思いましたね。

今さらボイラーでもないので、3台の家庭用石油ストーブを焚き、とりあえず「ジベレリン」(注2)を使用することにしました。一番寒い1月下旬のことです。2週間たっても変化が見られないので、2月になって、もう一度使用。効果があったのかどうかは不明でしたが、2月の下旬から少しずつ収穫も始まり、下旬になってやっと本格的になってきましたね。3月になって毎年恒例の市内の小中学校の学校給食用イチゴにも、予定のノルマ以上の協力が出来、3月下旬に我がハウスであった「イチゴ勉強会」では、先生から及第点をもらうことができました。ウドンコ病は一度ハウスに入ると、完全に復活させるのは困難だといわれています。今年のイチゴの出荷もまもなく終了となりますが、よくここまで立ち直れたと思いますよ。

4月5日にJAイチゴ部会の県外視察がありました。視察といっても、マイクロバスで、隣の山口県の農林総合技術センターへ行き、ついでにお寺と神社(防府天満宮)へ寄って、丁度満開で見頃になっていた桜を見て帰っただけですがね。花市場勤務時代に、ずいぶんとハウス視察に行きましたが、今回は生産者の立場での視察ということで、新鮮に感じましたよ。イチゴの専門研究員による新品種の紹介や、先進技術のハウス設備の説明は大いに勉強になりました。けっして、今すぐに役に立つというものではないですが、情報の収集と交換の機会は大事ですね。



4月9日付の地元新聞に、こんな記事が載っていました。最近若い新規就農者が増えているらしいのですが、40代以下の就農人口は増えていないというのです。せっかくサラリーマンから転職して農業を始めても、定着できずにやめる人が多いらしいのですね。イチゴ栽培を始めた36歳の男性のことが載っていました。ビニールハウスを2棟建てて、千株の苗を入れ、ミツバチと暖房も入れたのですが、ウドンコ病にやられたらしいのです。無農薬にこだわったこともあったのですが、2年間売り物にならず、やめて元の仕事に戻ったというものでした。

初期投資でかなりのお金を使ったようですし、可哀想な気がします。しかし、彼の場合は、経験を積んだ相談相手が側にいなかったことが、問題のように思いますね。農業というのは知識よりも経験が一番大切だと思うのですよ。イチゴの新品種というのは、概して病害に弱いのです。私の作っている「紅ほっぺ」という品種も、果実は大きくて糖度も高いのですが、病気に弱いという欠点があります。イチゴ栽培を始める前に、品種の選定とか、病害対策や施設のことなどを、ベテランの生産者に相談していたら、全く別の形になったのではないかなと思うのです。

災害や病害だけではなく、農業の敵は他にもいます。畑を荒らすイノシシの話はよく聞くのですが、今年はもっと厄介な「敵」が現れました。野生の「サル」ですよ。私よりも少し山側にある何人かの生産者のハウスは、サルに入られて被害が出たようです。ないしろ知恵が働きますから、少々「オドシ」では効果はありません。私のハウスのすぐ側の畑も荒らされましたが、幸いにもハウスは無事でした。声を上げたり、物を投げた程度では退散しませんね。人が側に来ても平気、堂々と歩いて行きます。近くのイチゴ農家のFさんは、畑とハウスの周りにグルリと3m位のネットを張り、下側に電気を通して見せてもらって驚きました。それだけ本気で農業に取り組んでいるということでしょう。私はここまで投資をする気にはなりません。しかし、暖かくなった3月の終わりごろから、サルはピタリと姿を見せなくなりましたね。



「対岸の火事」と思って、熊本の地震被害の事を他人事のよう
に書いていたら、今度は自分の身に降りかかってきました。
災難はいつも突然やってくるのです。5月4日の朝、前夜の台
風並みの強風が気になって、朝一でハウスに行ってみたら、
惨憺たる状態に愕然。閉めた筈の外張りのビニールが吹き上
がって、ハウスの屋根の西側の半分が青空状態。内張りの断

熱シートはボロボロに破れて天井のシャフトからぶら下がり、内張りビニールを巻き上げるクルップ
は、大きく曲がって外に突き出ています。あまりの事に、しばらく呆然と眺めていました。「連休
中じゃけえ業者も休みじゃろう」「連絡がついても、よそも被害があろうし、すぐには来てくれん
じゃろうな」「修復になんぼかかるじゃろうか」……そんなことですね。

「我が農園も一卷の終わりかのう」などと思っていると、遅れてやってきた妻が言うのです。「これ、
もしかしたら使えるんじゃないの」外張りのビニールを巻き上げるクルップのことです。私のハウス
は3年前に改造して、ハウスの外張りのビニールを巻き上げられる構造にしているのですが、それ
を巻き上げる道具のことですね。右半分のビニールが、強風のために反対側に全部押されて、た
たまれた状態になったので、クルップはハウスの途中で宙吊りになって、空を向いています。妻の
言葉に、「もう使えるわけないじゃろうか」と言いつつ回してみると、これが動いたのですよ。そして、
そのまま反対側までビニールを戻すと、なんと元の形に戻ったのです。何か所かビニールの損傷
はありましたし、内張りシートは全部ダメになりましたが、外見的には前と変わらない状態です。こ
れは、ほとんど奇跡的です。一日かけて修復した後で、妻が一言「壊れたハウスの写真を撮って
おけばよかったのに」…禍の最中にそんな余裕はないですね。

妻の「素人(しろうと)判断」が功を奏したということですが、これは
「不幸中の幸い」というべきで、私は非常に運が良かったのだと思いま
す。4年前に他界した父が、「もうチイと、頑張ってみいや」と言って、
守ってくれたのかもしれませんが。私のイチゴ栽培は、あと3年で70歳ま
で、と考えていましたが、「体がついて来ればやれるだけやってみよう
か」という気持ちになっています。農業は何でもそうですが、特にイチ
ゴ栽培は体が健康でなくてはできません。生産、収穫、出荷、運送、そして営業と伝票処理、さら
にハウス管理を、自力でこなさなくてははいけません。一年中仕事がありますし、苗を植えて収穫が
始まり、出荷を終えるまでの約10か月は一日も休めないからです。残りの2か月は終了株の処分
と、植え込みの準備になります。ハウスの中を歩いていて思うのですよ。「コイツらはワシがおらんと
一日も生きていけんのじゃけえ、倒れるわけにはいかんのう」と。思えばイチゴを始めて5年間、
病気で寝込んだことは一度もないですね。



**「ホンマにシンドイことはエツとあるんじゃが、ワシがイチゴに元氣をもらうとるんかもしれんけえ、体
がマメなうちは頑張ってつくる方がエエんかのう」**

(注1) ウドンコ病

白いカビ状のものが生じて、やがて株全体を覆ってきます。イチゴ、ニンジン、エンドウ、キュウリ
など多くの野菜や、バラなどの花にも生じます。一度発生すると完全な防除は困難で、果実に出る
と商品価値がなくなります。

(注2) ジベレリン

農薬として、種なしブドウの生産や、果実の落下防止、成長促進などに使用されています。今回
のイチゴの場合は、株の根元(クラウン部分)に噴霧することで、寒さのため休眠状態になった株を
覚醒させる目的で使用しています。

(余談 1)

熊本で地震が発生した直後、4月16日の夜9時頃のことです。私と妻は、山陽自動車道下りの小谷SAに寄ろうとしていました。二日間の車の浦での雛人形展の片付けを終え、疲れ切っていましたので、帰路の途中で夕食をとることにしたのです。ところがSAの入車線に車が連なって渋滞状態なのです。「こんな時間に何が起こったのじゃろう」と思いましたね。中に入ると異常なほどの大型トラックの列。そしてその多くが、カーキ色の自衛隊の車両。やっと私たちは理解しました。地震の救援部隊が九州に向かっているのです。食堂で慌ただしく食事をしている隊員とともに、「日本赤十字」と書かれた制服の人もありましたね。こんな大きな災害には、自分だけの力ではどうにもなりません。こういう人たちの手助けがどうしても必要なのですよ。そして最後は自分自身で立ち直るしかないので。改めて日本という国、日本の若者を「たのしく」感じましたね。

(余談 2)

今から約20年前の阪神大震災の時に、一番最初に「柔軟な発想」で「迅速な対応」をしたのは、行政ではなく、神戸に本部をおく「反社会的勢力」でした。彼らは全国的組織の情報を駆使して、正規の輸送経路が寸断されているなか、「裏ルート」でいち早く、被災者が必要としている物資を届けたのです。このような彼らの「善行」は新聞には報道されることはなかったのですが、わたしは週刊誌の記事で知りました。「困った時は、おたがいさまやないか」と言っていたとか。

(蛇足 1)

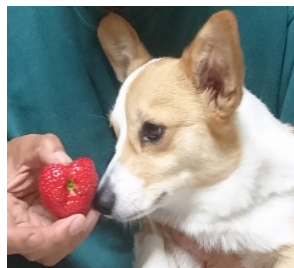
長年、我が家の敷地内に住んでいた「シマヘビ」クン(コラム46:2015 私の農業 参照)が死にました。5月11日、初夏のような暑さの昼下がりでした。私が事務所から出ると、石垣の側の砂利の上に何かあるのです。ヘビのヌケガラ(!)一瞬そう思いました。近づいてよく見ると、それはカレの最後の姿だったのです。今にもこちらに動いてきそうなほどに、ツヤツヤとした肢体で、全く外傷はありませんでした。まるでヘビであることを主張しているかのように、見事にとぐろをまいていました。私は庭の片隅の大きなヤマモモの側に埋めてやりました。最後にカレの姿を見たのは今年の7月、10か月ほど前でしたね。



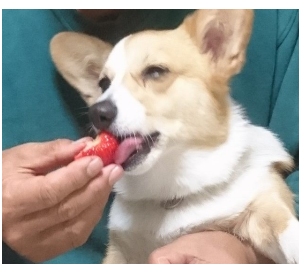
(蛇足 2)



ハート型のイチゴが採れました



「なんや、うまそうやないか？
ええ匂いしとるで」



「ウマイ！こりゃ、ナカナカいけるわ！」

(注)ウチのベリーは和歌山生まれなので、関西なまりがあります。